

木 精

— 或る青年期と追想の物語 —

北
杜
夫

新潮社版

木こ精ぎょう

——或る青年期と追想の物語——

一九七五年六月一日 発行
一九七五年一月三日 六刷

定価 九〇〇円

著 者 北 杜 夫

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一 六 二

東京都 新宿区 矢来町 七一

電話 業務 〇三二六六—五二一一

編集 〇三二六六—五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 株式 会社 光 邦

製本 新宿 加藤 製本

© Morio Kita 1975. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

木 精

―或る青年期と追想の物語―

はるかなる国とおもふに狭間には
木精おこしてゐる童子あり

茂吉

第一章

神経研究所の、古めかしい、いかつい玄関を出ると、戸外はすでに暮色に包まれていた。もと
もと今朝から空はどんよりと曇っていたが、それが夜のいろと混りあつて、頼りない、おぼつか
ない、うそ寒い氣分を人の心に吹きこんでくるかのようだった。

岡のうえにある研究所の前からは、下の町が一望で見渡せる。多くは四階建てくらいのもので、屋根瓦の赤い色も、かぶさってくる夜のいろにおおい尽されている。

五月も末のころから、強い芳香を放つかスタニエンの白や桃いろの花がこの町では咲きだすのだったが、その木も今は小さな栗色の実をつけている。

つまり秋で、太陽の照るときも、日ざしがなんとなく白っぽく見える。ものの影が長くなる。その秋が、実に短い。

すぐに、長い長い冬になる。あと何ヵ月くらい、あの寒い、陰鬱な、曇天つづきの日がつづく

ことか。

見おろす町並には灯がまたたきはじめた。追われるように道を急ぎながら、ぼくの心はさつきから同じことを繰返し思っていた。今夜は、暖かい米の飯をせめてたっぷり食べよう、と。

このチュービンゲンにきてから、ちょうど二年が経っていた。しかし、べつだんの感傷も起らなかった。それよりも、ほかほかと湯気の立つ米の飯。研究所の食堂や学生食堂でたまに出る、長細いぼそぼそした米ではなく、丸っこい粘り気のある米の飯。

ぼくは道を急いだ。

今、ぼくの下宿している家には、マイアー未亡人、学生たちがヘルガおばさんと呼んでいる初老の女が、かなりの年配の出戻りの娘と二人だけで住んでいる。ぼくのほかに三人の学生を下宿させて、階下は小間物屋をやっている。

灰色の髪と茶色の目、頬がたるんだように肥っているこのヘルガおばさんは、下宿人には一切干渉しない。日本人であるぼくにも好奇心も抱いていない。正直のところ、これはぼくにとって有難いことだ。おまけに、ぼくは二つの特権まで有している。

一つは週一回、風呂を使わして貰えること、一つはときどき台所を使ってもよいという許可であった。

もっとも初めは入浴は断られた。

「すぐ五分も行ったところに風呂屋があります。そこを使えばいいでしょう」

「一度もいけないのですか」

「いけません。それに研究所には風呂があるでしょう」

たしかに研究所には風呂があった。ぼくはここに来たころ、風呂場にはいつてみるといっても湯が出るので、毎日のように入浴していたところ、婦長に怒られた。特殊な場合をのぞき、土曜日しかはいつてはならぬというのである。

「あなたのように、風呂、風呂、という人ははじめてですよ」と、ヘルガおばさんは言った。

「でも、日本人は毎日、入浴する習慣があるので」

と、ぼくは少し大げさなことを言った。

「風呂屋へ行きなさい。下宿人は風呂には入れないのが家の主義です」

そのうち、おばさんの娘が風邪をひいて高熱を出した。ぼくが日本から持ってきた風邪薬を与えたところ、嘘のように熱が下った。ヘルガおばさんは、それから週一度、ぼくに風呂を使わせてくれるようになったのだ。

しかし、今日はその日ではなかった。ぼくはまず地下室へ行つて、その一隅の箱に入れてある自分局の石炭のいくらかを、四階の自室へ運んでいった。

小さな石炭ストーブの下の方をあげ、新聞紙と木切れを燃やし、どうにか石炭に火をつけた。この作業はいつも憂鬱感を伴った。殊に凍つくような冬の日に、うまく石炭が燃えぬときなどは。

ぼくは、それから風呂屋へ行くことにした。ウーラント浴場という詩人の名を冠した店で、チュービンゲンではただ一軒の存在である。受付で切符を買う。シャワーは五十ペニツヒ、バスは

一マルクである。ぼくは夏以外はほとんど風呂にはいる。

一階下にさがってゆくと、鶏にそっくりな、とがった顔をしたお婆さんが、風呂場の鍵を開けてくれる。ぼくは平均して週に二回は入浴にくるから、ずいぶんの顔なじみのはずだが、お婆さんはおおよそ無愛想で、言葉ひとつかけるでもない。ぼくにしてもそうだ。

三畳ほどの狭い浴室は、壁もタイルも白く、清潔だが、反面、殺風景でもある。鏡と椅子がひとつ。湯口の栓をひねり終ってから、椅子のうえに衣服を脱ぎ、自分の裸体を鏡に写してみる。また少し瘦せたようだ。もっともいつもそのように感じるのだから、気のせいかもしれない。

ときに、むかし母の部屋にあった大鏡のことを思い出したりする。あの鏡は、なぜとなく洗面をつくって、部屋の調度やはいってくる人物のことを事こまかく調べているかのような印象を、少年のぼくに与えたものだ。それに比べて、ここの狭い浴室の鏡は、数学の方程式のように無味乾燥だ。それは単なる硝子で、ただぼくが疲れているときや憂鬱な気分にとりつかれているときは、それをごく具象的に映しだしてくれるだけだ。

タオルや石鹸は下宿から持参してきている。そのほかに二、三枚の下着。ぼくはいつも風呂の中で洗濯するのが習慣になっていた。ドイツ人は小さな袋に石鹸を入れて体を洗うが、ぼくの場合はシャツやパンツに石鹸をぬりたくって体をこする。

浴室の使用時間は三十分と決っているもので、洗濯をかねた入浴は、のびのびとした気分にはたれるというより、どこかせかせかとしたものになる。それでも、浴槽のふちに頭をもたせて仰むしていると、終戦後の混乱した時代には、地方の高等学校の寮生活で、月に三度くらいしか風呂にはいれなかったものだな、などと考えて、ちよっぴり幸福感にひたることもある。

けれども、今夜はつかのまの安らぎも訪れなかった。思わず湯の中で、将来に対する危惧の念にとらわれて時間をつぶし、はっと気がついて、ぼくはあたふたと浴槽を出た。

体をふきながら、つい鏡を眺めると、さいぜん湯にはいる前よりも、もっと疲れたような、けだるそうで陰気な、もうじき三十一歳になろうとしているぼくの顔がそこにあった。

「とにかく飯をたっぶり食べよう。暖かい米の飯を」

と、ぼくは痴呆のように考えた。まるでそれが唯一で最高の解決策でもあるかのように。

留学生はたいいてい一度は憂鬱症にかかるというが、ぼくはしばしばそれにとりつかれたことがあった。なかでも最悪の時期はドイツにきて一年の余も経ったころのことで、正直いつて将来の希望がまったくなくなり、ぼくは自殺をも考えたし、ドイツ人の同僚の医者に相談して薬を飲んでいた時期もあったのだ。

ともあれ、下宿へ帰りつくと、すでにこの家の台所は片づけられていた。

ぼくは大きな鍋に米を入れて、指で深さをはかって水を加え、ガスにかけた。それから地下二階へ降りていって（この奇妙な穴蔵についてはいづくわしく書くことがあるだろう）、自分の卵を二箇と、ビニール袋にはいった生のイカを持ってきた。このイカは近くのシュトゥッツガルトのスーパー・マーケットで売っている。出稼ぎのイタリア人労働者が食べるからだ。ぼくは昨日、シュトゥッツガルトへ行った日本人留学生から、この小さなほそいイカを四匹貰ったのだった。イカは小鍋で煮て、醬油を加えた。

はじめはかなり勢いこんでこうした作業に打ちこんでいたのだが、ふいにぼっかりと虚脱感があった。それは以前から夜、しばしば訪れるものだったが、昨今は昼間、研究所で働いているとき

にもだしぬけに襲ってくるようになっていた。

それからのぼくは、あやつられたように機械的に食事の支度をした。ようやく炊きあがった飯とイカの煮つけを、四階の自室に持ってあがる。鍋のふたととると、懐しい湯気が立ちのぼってくる。むらす時間がなかったから、ふつくらとはいかないが、たまにしか食べぬ日本のそれに似た米の飯の匂い。こちらではこの丸い粒の米は好まれずいちばん下等米なのだ。

ぼくは日本からわざわざ持ってきた茶碗にそれをよそり、生卵と醬油をかけ、かきまぜて夢中で呑みこんだ。三杯食べ、四杯を食べた。イカも醬油味だけで辛かったが、ろくに咀嚼もせず喉から呑みこんだ。そうすることが、心の空虚さを埋めてくれるかのように。

「まるで餓鬼のようだな」

と、ようやく息をついてぼくは考えた。

「終戦後の食糧難時代そっくりだ」

卵といえば、ぼくが卵を生で食べると知ったとき、下宿人には極めて無関心のヘルガおばさんも、さすがにおどろいたようにこう尋ねた。

「まあ、本当に生のまま？　気持わるくありませんか」

ぼくが日本人の半数は卵を生のまま食べるのを好むのだ、と答えると、おばさんはこう言った。「だから、日本人は沢山子を産むのか」

腹がくちくなると、それまでぼくを取りまいていた焦慮感こそなくなったものの、もっと根深い、内閉的なぼくには生涯ずっとついてまわるのかもしれない孤独感が、じわじわとおし寄せてきた。

孤独感——思いだしてみれば、高校時代から、いや、子供時代からしょっちゅうぼくはそれにつきまとわれていたものだ。ひたすらいがらっぽいや、甘美な孤独といったような若者に特有のそれもあった。

人はなぜ追憶を語るのだろうか、とむかし、ぼくは創作ノートに一行だけそう書きつけたことがある。

すると、ふいに幼い少女の声がぼくの耳によみがえってきた。

「なんだか、わかる？」

と、ぼくは自分で半ば無意識にハステルで色をぬりたくった画用紙を見せて尋ねていた。

幼い少女は首をこっくりさせた。そしてぼくに意味ありげな錯覚をひきおこさせたことに、単調な、一音々々くぎるような口調で、こう答えたのだった。

「ゆ、う、れ、い」

「どうして？ 幽霊を知ってる？」

「夢にみるわ」

「こわいかい？」

「こわくないわ。こわくないって、ママが教えてくれたの」

「その幽霊って、なに？ どんな幽霊？」

「わからない、と少女はこたえた。そしてこうつけ足した。

「幽霊って、この世にいるものじゃないわ。頭のなかだけにいるものよ」

「……………」

「ママがそう言ったわ。気の毒な人にだけ、幽霊が住みこんじゃうんだって」

彼女はわらった。まるで喉かなにかをくすぐられたときのように笑ってみせた。

「ぼくも幽霊の夢をみるよ」

「そう？」

少女は、つぶらな、まだ少し虹彩のあおみがかった目を睜いて、こちらを見あげた。どこなく、気の毒そうに。

あのとき、ぼくはドイツで父母と知合だったという夫人の家に泊めて貰ったのだった。

そして、ぼくにつきまとっていた幽霊は、幼いときに別れた母の幻影だったことを、やがて槍ヶ岳の凍えるような一夜にまざまざと知ることができたのだ。

ぼくは憶いだす。あの山々の夜景が、星空がなんと莊嚴であったことか。そして、ぼくは夢想したものだ——旧い神話のつたえる、もっとも素朴で、もっとも根源的なひとつの天地創造説のことを。はじめ、《渾沌》だけがあり、そこから《大地》と《夜》が生れ、《夜》の卵から《愛》がうまれた。古い夢の深み、埋もれていた記憶のなかで、ぼくは実際にその景観を見たと思しこんだものだった。

その翌朝、ぼくは槍ヶ岳の小屋を出、下界へとむかった。とにかく人間のなかへおりて行こう。ひよっとすると、いつか、どこかで、過去にいくたびかぼくの心をふしぎに波打たせたあの少女らの一人にめぐりあうことだってあるかもしれない。ぼくの心はそのときその一つの観念に固定されていた。

あれから、十年余という歳月がながれた。有体ありていにいえば、そのあいだにぼくの夢は叶えられ、

そして無限の飲びと苦悩の果に、今はもう消え去ったといつてよい。

ぼくは食器を片づけ、見るともなく部屋を見渡した。屋根裏部屋のため、天井の半分が斜めになっている。木の鎧戸のある二つの窓。小机にいくらかの書物。一年ほどまえまでいた下宿の部屋より広かったが、それにしても月六十マルクの安部屋にはちがいがなかった。

留学して一年経たぬうちは、なにもかも夢中で、すべてのことが刺激になり、大げさにいえばスリルと冒険の中にいつも自分がいるかのように意欲的でもあった。いわば心は外界に好奇にあふれて向けられていた。それが一年も過ぎると、異国での生活にも慣れ、心が自分の内部へ向けられる。すると、いやでも内向的なほどの性格がわるいほうへと強められてくるのだった。自殺などということを考えたのもその頃のことだ。

そういう時期は去ったにせよ、最近、ぼくはまた大きな不透明な壁にぶつかっていた。一つはぼくが従事している研究所の仕事についてのことである。

ぼくは日本の大学病院の神経科の助手であったが、たまたまドイツ帰りの講師の手助けをして、筆圧計による実験をずっとやっていた。その論文をチュービンゲン神経研究所の助教授がよみ、自分のやっているのと同じ研究だからと、交換助手の形で、ぼくはフンボルトやDADの留学生とは別にこちらにこられたわけだ。筆圧計とは、ここの教授である老碩学、クレッチュマー博士の考案したもので、文字を書かせたものが脳波計のようなグラフになって出、正常者とノイローゼ患者のあいだには差異があつて、診断に役立たせることができる。

ところが、チュービンゲンにきて、ぼくの与えられたテーマは、正常者と分裂病患者のそれを比較することであつた。一年も経たぬうちに、その実験が無意味ではないかという疑問がぼくの

心に生じ、時と共に大きくなっていった。そう、今までのデータによれば、明らかにこの研究は無益のようである。しかし、いくらそう述べてみても、ぼくの研究の指導をしている助教授はがんとして他のテーマを与えてくれぬのだ。

ドイツ人が頑固だとは聞いていたが、これほどまでに徹底してかたくなだとははじめて知った。ぼくの聞いた例でも、小児麻痺にペニシリンは無効だとうに判明しているのに、なお五年間ペニシリンを与えて追試をしろと命じられて実行している医者もいた。

こうして、どうせ答はでぬとわかっている研究をつづけていって、一体なんの意味があらうか。

ぼくは苦笑した。これからも、こんな索漠とした気持で研究所へ通い、夜には殺風景な屋根裏部屋で憂鬱な想いを反芻することを一体いつまでつづけねばならぬのか。そもそも、なぜ自分はこんなところに、きしむベッドのうえにいつまで坐っているのだらうか。

ぼくがドイツにきたのは、学問をするためもちろんだが、人には告げられぬが、一人の女性と思いきって別れるため、ということも大きな要因でもあった。

ノッ子。倫子^{のりこ}。おまえは今、どこで、何をしている？

とうとうぼくはこの名前を記してしまった。一人でいるとき、呪文のようにしょっちゅう口のなかで呟いてきたその名を。

しかし、彼女に手紙を出すことはおそらく将来も決してしないつもりだ。二人で、固くそう約束したことだから。長々と解決のつかぬ恋の涯に、だしぬけにドイツにくるように決めたのも、二人がいずれは別れねばいけなかったからだ、といってもよい。それには外国という当時にしてはおよそ遠い距離が必要だった。

倫子。それでも君はマニラよりもっと先までついてきた。何も船に乗船していたわけではない。カンボジア丸が横浜を出港する前日、ぼくらは最後の抱擁を交す時間を持つことができた。そしてそのあと、倫子、君はぼくの胸の下を長く強く口で吸った。それは濃い痣となり、船が香港を発ち、次にマニラに寄るまでも残っていた。

それにしても、香港に着いたときにはおどろいたものだ。ぼくは四等船客の六人部屋で、食事にも上甲板の下のボートのオールとかロープ、シートなどが置かれた物置小屋のような広間で、鉄の盆を持って並んでいると、スूप、肉、豆などをバサッとそれに入れてくれる相当にひどいものであった。セルフ・サービスというより飯場といった光景であった。ペンキを塗った船の胴体がそのままに見え、刑務所にも閉じこめられた気分がした。

ところが、自分は最下等の部屋にいますと思ひこんでいたのに、もう一つ下の船倉があったのだ。香港からは出稼ぎにゆく汚ない中国人がどっさり乗船してきて、そこに居をかまえた。彼らはまさしく貨物なみの扱いを受けていた。事実、荷物取入れ口の覆いを取ると、ニンニクや各種の食物や汗の入りまじった臭気がムッと立ちのぼってくるのだった。

船はマニラ、サイゴン、シンガポールと寄港したが、サイゴンからはフランス兵や顔のつぶれた男もまじる東南アジア人がまた数多く乗りこんできて、船倉は完全に一杯になった。彼らははだして歩きまわったし、兵隊にしても下っ端の者たちで、ぼくはゴールキーの『どん底』を思いだしたくらいだ。そして、部屋こそ六人部屋であったが、ぼくもその一員なのであった。

風呂はなく、シャワーだけだったが、そのシャワーをあびるとき、ぼくは、自分の胸につけられた倫子の唯一の記念を確めた。それは次第に薄れ、マニラとサイゴンとの間で、船の舳先が形

造る水泡^{みなわ}がやがて溶け去るように跡形もなく消えていった。

夜もふけると、冬の近づいてきたこの町は完全にしんとしてしまふ。家の中でもの音を立てるのはタブーで、そのためドイツ人は風呂はもとより、トイレットの水も夜ふけには流そうとしない。冬には、昼間から陽光も乏しいし、娯楽も少ないから、学生たちはいやでも勉強をするしか仕方がないという感じだ。

そうでなければ、ネッカー川にかかる橋のたもとにあるタンテ・エミールという店に行く。警察時間の十一時までは、ギターをかき鳴らしたりしてみんなが合唱する。ぼくがチュービンゲンに初めて着いたころは、カテリーナ・ヴァレンテが歌った「オー・マイン・パパ」という陽気な曲が流行していた。エミールおばさんは二代目で、初代が有名だったそうだが、瘦せた二代目の初老のおばさんも、酔っぱらって学生たちと一緒に歌ったりしていた。口金つきのビールが一本五十ペニツヒ。壁に落書の一杯あるセルフ・サービスの店で、学生たちは勝手にびんをとり、勝手に金を落書の一杯ある低い机の上に置いてゆく。エミールおばさんはバス・ガールのように大きな墓口を腹に下げていた。

しかし、ここ半年くらいまえから、ぼくはそうしたにぎやかな場所へ出かけてゆく気になれなくなった。むしろ避けていた。

ちよつと窓を開いてみると、冷たい夜気がせつかに忍びこんできた。外の闇も、灯はともっているにせよ部屋の中の夜も、次第に底の知れぬほど奥ぶかく大きくなっていった。

ぼくはその夜のなかへ沈んでゆく。とめどもなく、さながら幼年期にそうであったように。